

# ゲーテの『親和力』

西 川 智 之

## 1. 会話から沈黙へ

『親和力』は次のように始まっている。

Eduard – so nennen wir einen reichen Baron im besten Mannesalter – Eduard hatte in seiner Baumschule die schönste Stunde eines Aprilmitttags zugebracht, um frisch erhaltene Propfreiser auf junge Stämme zu bringen. (I-1, S.271)<sup>1)</sup>

エドゥアルト—私たちは男ざかりのある裕福な男爵をこう名付けよう—エドゥアルトは、みずみずしい穂木を若い台木に接ぐために、ある4月の午後のすばらしい何時間かを種苗場で過ごしたところだった。

最初の文章で「wir」という言葉が使われていることで、読者は饒舌な語り手を予想してしまうかもしれない。<sup>2)</sup>しかし、実際には語り手はすぐに背後にしりぞいてしまう。それどころか、読み進めていくと、語り手が物語をリードしてくれるどころか、物語を展開していくのは語り手ではなく登場人物であるかのように思われてしまう。例えば、読者にシャルロッテのいる場所を教えてくれるのは、庭師である。そればかりか、庭師はこの物語世界の風景も読者に伝えてくれる。

Hast du meine Frau nicht gesehen? fragte Eduard, indem er sich weiter zu gehen anschickte.

Drüben in den neuen Anlagen, versetzte der Gärtner. Die Mooshütte wird heute fertig, die sie an der Felswand, dem Schlosse gegenüber gebaut hat. Alles ist recht schön geworden und muß Ew. Gnaden gefallen. Man hat einen vortrefflichen Anblick: unten das Dorf, ein wenig rechter Hand die Kirche, über deren Turmspitze man fast hinwegsieht; gegenüber das Schloß und die Gärten. (Ebd. 下線は西川)

エドアルトは、その場を立去る姿勢を見せながら、「家内を見かけなかったかい？」と尋ねた。

「あちらの、新しいお庭のほうでございます」と庭師は答えた。「奥様がお館の向いの崖ぎわにお建てになりました苔小屋がきょう完成いたします。万事とてもうまく出

来あがりましたから、旦那さまもお気に召されるに相違ございません。見事な眺めでございます。下手には村が見え、ちょっと右寄りには教会がございますが、この教会の塔のいちばん上のところさえほとんど眼の下に来るほどでございますし、真向いがお館とお庭というわけでございます」(翻訳 105 頁)<sup>3)</sup>

さらに登場人物の言葉に先導されるかのように物語は展開していく。エドゥアルトは庭師に対し、次のように指図する。

Geh zu ihr, sagte Eduard, und ersuche sie, auf mich zu warten. Sage ihr, ich wünsche die neue Schöpfung zu sehen und mich daran zu erfreuen. (Ebd.)

「家内のところへ行って、わしが行くまで待っていてほしいと伝えておいてくれ」とエドアルトは言った。「<新しい苔小屋を見たい。出来ばえが楽しみだ>と話していたと言ってな」(翻訳 同所)

この言葉に促されるように、語り手はエドゥアルトがシャルロッテのいる「苔小屋 Mooshütte」への道をたどって行く様子を描写するからである。このように第Ⅰ部では、語り手の語りによって物語が進展するというよりは、登場人物の発する言葉あるいは会話をきっかけとして物語が展開していく傾向が強い。

別の場面を見てみたい。第Ⅰ部第10章では、伯爵と男爵夫人が登場するが、彼らの来訪は、その前の章で主人公たちの会話によって告知される。

Wie wir vermuteten, rief Eduard Charlotten zu: der Graf wird nicht ausbleiben, er kommt morgen.

Da ist also auch die Baronesse nicht weit, versetzte Charlotte.

Gewiss nicht! antwortete Eduard: sie wird auch morgen von ihrer Seite anlangen. (I-9, S.335f.)

「そのうちにきっと来るというほくたちの予想どおり」と、エドアルトは大声でシャルロッテに呼びかけた。「伯爵はあす到着するそうだ」

「それでは、男爵夫人もいずれはおいでになりますわね」とシャルロッテが答えた。

「もちろんさ」とエドアルトは答えた。「男爵夫人のほうもあす別の方角から到着するらしい。」(翻訳 163 頁)

伯爵と男爵夫人の関係について大尉が質問すると、「二人は昔、すでにそれぞれ結婚している身で、互いに熱烈に愛し合うようになっていた」こと、そして「離婚を考えは

したものの、男爵夫人のほうは成功したが、伯爵のほうは駄目だった」ため、「二人は、表面上は別れなければならなかったけれども、実際の関係はそのまま続いた」(S.336、翻訳 163 頁) ことなどが明らかにされる。この部分はエドゥアルトやシャルロッテの言葉がそのまま再現されているわけでもないし、また、段落の最後の方では、「もしシャルロッテがその原因を詳しく調べたとすれば・・・」(Ebd.、翻訳 164 頁) と、語り手のコメントが挿入されてはいるものの、やはり登場人物の会話が元になっていると考えられる。というのは、その次の段落はこう始まるからである。

Sie hätten wohl noch ein paar Tage wegbleiben können, sagte Eduard als eben Otilie wieder hereintrat, bis wir den Vorwerksverkauf in Ordnung gebracht. (Ebd. 下線は西川)  
 オッティエリエがまた入って来た時、エドアルトは、「もう 2、3 日あとに来ることにしてくれてもよかったのにな」と言っているところだった。(翻訳 同所)

つまり、この前の段落では、もちろん会話の内容をまとめて読者に伝えているのは語り手であるとはいえ、「sagte Eduard」や、「sagte Charlotte」が省略されていると考えられ、やはり登場人物の会話が物語を牽引しているのである。

上述の部分との比較として、第 II 部で寄宿学校の助手が登場する場面を見てみよう(II-6)。建築家の頼みで、キリスト降誕図の活人画の聖母マリア役を演ずるオッティエリエは、その観客の中に助手らしき人物がまじっていることに気がつく (S.440)。この助手の登場は、オッティエリエにとってと同様、読者にも事前の情報のない突然のものである。少なくともシャルロッテはこの助手の訪問をあらかじめ知っていただろうが、第 I 部のように会話で事前にそれを知らせはくれない。次の章(II-7)で、助手がなぜやって来たのかについて、助手自身の意図や気持ち、さらには男爵夫人の思惑も含めて細かく説明してくれるのは、第 I 部のように登場人物の会話ではなく、語り手の語りである。将来、助手が寄宿学校の経営を引き継いだ時のために、「同じ考え方をしてくれる妻 eine einstimmende Gattin」として「秘かにオッティエリエを心に思い描いていた Er hatte im Stillen Ollilien vor Augen und im Herzen」こと (S.448)、そして男爵夫人が、オッティエリエに好意を持っている伯爵からオッティエリエを遠ざけ、「結婚によって既婚女性にとっての危険性をより少なくすること sie durch eine Verheiratung den Ehefrauen unschädlich zu machen」をねらって、館を訪ねて行くように助手をけしかけたことなどを、語り手は伝えてくれるのである (S.449)。

これに続く部分で、語り手は館を訪れた助手とシャルロッテ、オッティエリエの間で交わされた会話を紹介するのだが、その会話はもはや第 I 部のようなはずんだものではない。

「オットーリエのことをどう思っているの？ wie finden Sie denn Ottilien?」（S.450）というシャルロッテの問いで始められた会話では、シャルロッテや助手は発言するものの、オットーリエに関しては、その沈黙が強調されるのである。

Ottilie konnte das nicht leugnen; aber sie konnte nicht gestehen, was sie bei diesen Worten empfand... (II-7, S.450)

オットーリエも、それを否定は出来なかったが、そう言われて自分が感じたことを告白することも出来なかった。（翻訳 264 頁）

Ottilie durfte nichts dagegen sagen, ob es ihr gleich vor dem Gedanken schauderte. (II-7, S.451)

オットーリエは、寄宿学校に戻ると考えただけでぞっとする思いだったけれども、何ひとつ反対意見を述べるわけにはいかなかった。（翻訳 264 - 265 頁）

さらに会話は、ルチアーネが残していった本を巡って別なテーマに移行していくのだが、その会話がどんなものだったのかは読者に披露されることはない。その代わりに、「しかし、この出来事がきっかけとなって、ある会話がかわされたようだが、その痕跡を私たちはオットーリエの日記に見出すことができる。Dieser Vorfall mag jedoch zu einem Gespräch Anlaß gegeben haben, wovon wir die Spuren in Ottiliens Tagebuch finden. (Ebd.)」という文章に続いて、アフォリズム風のオットーリエの日記が挿入されるのである。

このように第Ⅱ部では、エドゥアルトと大尉が物語の舞台から姿を消すこともあって、第Ⅰ部のように登場人物たちの会話が物語を展開させることはもはやない。それどころか、オットーリエに関してはその沈黙が目立つようになり、後述するように、最終的にオットーリエは自らに沈黙を課すことになるのである（II-16, S.511ff.）。

今、オットーリエの日記について触れたが、随所に手紙や日記が挿入されていることは、この小説の特徴のひとつである。第Ⅰ部と第Ⅱ部の手紙を比較することで、会話から沈黙へ移行するという『親和力』の特徴をさらに明らかにしてみたい。

まず取り上げるのは、第Ⅰ部第5章の寄宿学校の校長と助手の手紙である。第4章での「親和力」についての会話を締めくくるかのように、シャルロッテはエドゥアルトと大尉に対し、オットーリエを呼び寄せる決心をしたことを告げる。そして一通の手紙を渡して、エドゥアルトに読んでみるように要求するのである。そして続く第5章では、エドゥアルトに渡された寄宿学校の校長と助手のその手紙が、何のコメントも挿まれることなく、そのままの形で載せられている。しかし手紙の文面が終わると、次の段落は

以下のように始まっている。

Eduard hatte diese Briefe vorgelesen, nicht ohne Lächeln und Kopfschütteln. Auch konnte es an Bemerkungen über die Personen und über die Lage der Sache nicht fehlen. (I-5, S.311. 下線は西川)

エドアルトは、ときおり微笑したり首をかしげたりしながらこの二つの手紙の朗読を終えた。当然のことながら、登場人物や事態について、さまざまな意見も出た。(翻訳 141 頁)

つまり、読者はエドアルトが手紙を朗読するのを聴いていたことになるのであり、登場人物たちの会話はまだ続いていたのである。

上述したように、第 I 部では会話により物語が展開していくという特徴が指摘できた。ここで取り上げた手紙についても、同じようなことが言えるであろう。手紙の名宛人であるシャルロッテ自身が、エドアルトに対し、大尉の前で手紙を朗読することを要求し、それが実行される。そしてその手紙が朗読されることで彼らの会話はさらに活性化し(「当然のことながら、登場人物や事態について、さまざまな意見も出た。」、さらには、物語の今後を予感させるような会話でこの章は終えられるのである。

..... es ist doch recht zuvorkommend von der Nichte, ein wenig Kopfweh auf der linken Seite zu haben; ich habe es manchmal auf der rechten. Trifft es zusammen und wir sitzen gegeneinander .....: so muß das ein Paar artige Gegenbilder geben.

Der Hauptmann wollte das gefährlich finden; ..... (I-5, Ebd.)

「頭の左側が少し痛むとは、オッティエリエさんもまた、うまくほくに調子を合わせてくれたものだ。ほくはときおり頭の右側が少し痛むのだから。二人が同時に頭痛を起して、・・・・向き合って座ったら、こりゃちょっとした対幅ができあがるよ」

大尉は「そいつは危険だ」と言った。(翻訳 142 頁)

対照的な手紙を、第 II 部から取り上げてみよう。第 II 部第 16 章で、エドアルトは寄宿学校に向かうオッティエリエを、途中の宿でつかまえようとするが、その際短い手紙を書く。突然姿を見せてオッティエリエをびっくりさせないようにと、オッティエリエに心の準備をさせようと考えたのである (S.509)。しかし、オッティエリエの泊まる部屋にこの手紙を置こうとしたエドアルトは、結局オッティエリエとはちあわせしてしまう。だが、二人の間で言葉が交わされることはない。「恐ろしい沈黙 *das furchtbare Schweigen*」に耐えられずに、エドアルトはオッティエリエに話しかけるものの、オッ

ティーリエは言葉を発することはなく、「顔色ひとつ変えることなく ohne die Miene zu verändern」エドゥアルトの手紙を読むのである（S.511）。

ここでは、ある意味先ほどの第Ⅰ部第5章と同じパターンが繰り返されているとも言える。しかし第Ⅰ部第5章では、登場人物の一人が、自分宛ての手紙を他の登場人物に朗読させるのに対し、ここでは登場人物の一人が自分に宛てられた手紙を、手紙を書いた本人の前で黙読するのである。そして、第Ⅰ部の先ほどの手紙は登場人物たちのさらなる「会話」の契機となり、この物語の世界、つまりエドゥアルトとシャルロッテの領地へオットーリエを呼び寄せることが決定された。それとは対照的に、この第Ⅱ部の手紙は、この小説の世界から出て行こうとするオットーリエを引き戻し、その後のオットーリエの「沈黙」の決定的なきっかけとなるのである。すでに指摘した会話の物語から沈黙の物語への移行という特徴は、ここでも指摘できるのである。

## 2. 「新しい庭園」と「古い庭」

すでに引用したように、『親和力』の冒頭、主人公のエドゥアルトは庭仕事にいそしんでいる。妻のシャルロッテも庭園造りの指揮を執っているのだが、しかし二人がいるのは別々の場所である。エドゥアルトは館の建つ敷地内にある種苗場（Baumschule）で接木の作業をしており、<sup>4)</sup> シャルロッテは館の向かいの崖ぎわに建つ苔小屋（Mooshütte）で、そこへと通じる道づくりを指揮している。

この点について水田恭平は、次のように指摘している。

物語の冒頭こうして紹介された空間的配置——エドゥアルト、庭師のいる庭と館の空間と、シャルロッテが作業している遊歩道の空間とが、結局この物語が展開される空間的拡がりを規定している。・・・いま設定されつつある空間的拡がりの中へ登場人物たちはやって来たり、またそこを去っていったりもするけれど、物語そのものは、本当にごくわずかの箇所を除いて、この空間を去りはしないのだ。<sup>5)</sup>

この冒頭部分で庭師は、シャルロッテのいる側を「新しい庭園 die neuen Anlagen」と、そしてエドゥアルトのいる側を「館と庭 das Schloss und die Gärten」（I-1, S.271）と呼んでいるが、このエドゥアルトのいる庭は、「館の大きな古い庭 der große alte Schlossgarten」（II-8, S.453）とも呼ばれており、シャルロッテのいる「新しい庭園」と対比されていることは明らかである。以下に述べるように、物語の空間を構成するこの二つの庭は、対照的な二つの世界の象徴なのであり、物語の冒頭、エドゥアルトが「古い庭」におり、シャルロッテが「新しい庭園」にいることは偶然ではない。この物語の主要な4人の登場人物は、「古い庭」と「新しい庭園」のどちらかに振り分けられるの

である。

第I部第3章、エドゥアルトとシャルロッテのところにやってきた大尉は、到着したその日のうちに「新しい庭園」の散策に誘われる。苔小屋で小休止した一行は、さらに上にある丘に到着し、そこから見える風景を楽しむ。大尉は「新しい庭園」改造のプランを立て、その工事の指揮を任せられることになる。シャルロッテと大尉の二人について、語り手は第I部第6章で次のような比喩を披露している。

Es ist mit den Geschäften wie mit dem Tanze; Personen die gleichen Schritt halten, müssen sich unentbehrlich werden; ein wechselseitiges Wohlwollen muß notwendig daraus entspringen. (I-6, S.319)

こういう仕事も、ダンスと似通ったところがある。同じステップを踏むパートナー同士は、そのうちに、必ずお互いに相手なしではすまされなくなり、そこから必然的に相互の好意が生まれて来ざるをえない。(翻訳 149 頁)

それでは、残る一人、オットーリエはどちらの庭に属するのだろうか。物語の中でオットーリエの散策について初めて言及されるのは、オットーリエがこの領地に到着してしばらく経ってからの、第I部第7章である。主人公たち四名は、館の右側の道をたどって水車小屋へ、そしてさらに林を抜けて崖の上や苔小屋を通って館に戻ってくる。その晩四人は、「新しい建物 *das neue Gebäude*」をどこに建てるか話し合うが、その場所についての最終的なアイデアを出すのはオットーリエである (I-7, S.325f.)。こうして見ると、オットーリエは、大尉同様「新しい庭園」の改造作業に関わるかのようである。

そもそも第I部は、「新しい庭園」、特にそこに建てられる「新しい建物」の起工式と竣工式を転機として物語が大きく動いていく。物語で初めて言及されたオットーリエを加えての散策は、「新しい建物」を建てる場所を決定するきっかけとなる。そして、起工式で割れることになかったグラスはエドゥアルトに、オットーリエとの運命を確信させることとなるが、「二重の姦通 *ein doppelter Ehbruch*」(S.492)が起こるのは、その翌日である (I-11)。また、竣工式での事故後、翌朝には大尉が去り、そしてオットーリエをここに留めることを条件にエドゥアルトも物語の舞台となっているこの領地から姿を消す。大尉の去った後、庭園や新しい館の建築は、大尉の教え子である建築家に引き継がれ、やがて工事に一区切りがつけられる (I-17, S.381)。

このように第I部は、「新しい庭園 *die neuen Anlagen*」に建てられる「新しい建物」をきっかけに、そしてオットーリエを巡って物語が展開していくのだが、オットーリエ自身は、この建物を建てる場所について提案したものの、「新しい庭園」や「新し

い建物」とそれ以上は積極的な関わりをもつことはない。上述の散策の後、続く第8章では、シャルロッテが新しい工事の「見積もりや時間ならびに予算の配分を自分だけでもう一度とつくりと点検する作業にとりかかっていた」(I-8, S.327、翻訳 156 頁)のに対し、オットーリエは家事を取り仕切るのに忙しく、<sup>6)</sup> 新しい庭園造りにはそれ以上関心を示さない。

しかし第Ⅰ部の最後の方では、もうひとつの庭が顔をのぞかせる。オットーリエが、「しばしば庭に足を運んだ nahm öfters den Weg nach dem Garten」(I-17, S.383)との言及があるのである。ここで言う「庭 Garten」とは「古い庭」のことである。そして第Ⅱ部では、「古い庭」へのオットーリエの愛着について何度か触れられるようになる。<sup>7)</sup> もちろんこの「古い庭」への愛着は、オットーリエのエドゥアルトへの愛情でもある。

Daß alles was Eduarden besonders lieb war, auch ihre Sorgfalt am stärksten an sich zog, läßt sich denken... (II-9, S.461)

エドアルトがとりわけ好きだったものすべてがオットーリエの注意をいちばん強く惹いたことは、容易に想像される。(翻訳 273 頁)<sup>8)</sup>

このように、『親和力』では、「新しい庭園」(シャルロッテ+大尉)対「古い庭」(エドゥアルト+オットーリエ)という図式が成立するが、それではそれが意味するものは何なのだろう。

第Ⅱ部第8章で、寄宿学校の助手は「館の大きな古い庭」を散策して、「大きな菩提樹の並木やエドゥアルトの父親が造らせた整然とした庭園 die regelmäßigen Anlagen」に感銘を受けるが、一方でそれがせつかく立派に成長したのに、「いよいよそれらの価値が認められその見事さを鑑賞すべきいまの時点になると、それはもはや誰の話題にもならず、訪う人さえほとんどなくて、人びとはその熱意と努力を別の方面へ向け、眼を広い野外へと ins Freie und Weite 転じてしまって」(II-8, S.453、翻訳 267 頁)いるとの感想を、シャルロッテに対し述べる。シャルロッテは、助手のこの言葉を特に否定することもなく、「庭といっても、いまでは誰も、無際限に広がる平地なみの庭でないと満足せず、少しでも人工や強制を思い出させるものがあってはいけないうことになっています an Kunst, an Zwang soll nichts erinnern. 完全に自由で、何の制約も受けずに空気を吸いたいというのが当世風なのです」(S.454、翻訳同所)と、今の「時代の傾向 die Neigung der Zeit」(S.453)をまとめてみせるが、しかしこうした自然らしさを演出するイギリス式庭園こそ、まさにシャルロッテ自身が目指しているものでもあった。<sup>9)</sup>

それに対しエドゥアルトの父親が作らせた「整然とした庭園 die regelmäßigen



Anlagen」とは、イギリス式庭園がブームになるまで一般的だったフランス式庭園のことである。フランス式庭園では、庭木は人の手によって刈り込まれ、シンメトリーを基本とした設計がなされ、上述したシャルロッテの言葉を借りれば、まさに Kunst と Zwang に富んだものである。エドゥアルトとオットーリエは、シャルロッテが手掛けるこうした新しい庭に象徴される「時代の傾向」に反対し、「父親の時代」に戻ろうというのであろうか。<sup>10)</sup>

しかし、エドゥアルトとオットーリエは、フランス式庭園よりもさらに古い庭を求めているように思われる。第 I 部第 17 章には、次のような文章がある。

Doch konnte sie sich von diesen Rabatten und Beeten nicht trennen. Was sie zusammen zum Teil gesät, alles gepflanzt hatten, stand nun im völligen Flor; kaum bedurfte es noch einer Pflege, außer daß Nanny immer zum Gießen bereit war. (I-17, S.383. 下線は西川)

そういうことがあったにもかかわらずオットーリエは、縁どりをつけたこれらの苗床から離れることができなかった。一部は二人して種をまいたもの、そして二人して植えたすべてのものが今や爛漫と咲き乱れ、必要に応じてナニーが水をやってくれる以外、手入れはもうほとんど不要だった。(翻訳 206 頁)

ここは、オットーリエにとっては、常に花が咲き乱れ、手入れせずとも果実が手に入る楽園なのである。しかし、エドゥアルトはこの楽園を出なければならなくなる。シャルロッテが妊娠していることが分かると、エドゥアルトはわざわざ危険な戦争に身を投じる。そして第 I 部は次のように終わるのである。

Ottielie, nachdem auch ihr Charlottens Geheimnis bekannt geworden, betroffen wie Eduard, und mehr, ging in sich zurück. Sie hatte nichts weiter zu sagen. Hoffen konnte sie nicht, und wünschen durfte sie nicht. Einen Blick jedoch in ihr Inneres gewährt uns ihr Tagebuch, aus dem wir einiges mitzuteilen gedenken. (S.393、下線は西川)

自分もシャルロッテの秘密を聞かされて以後、エドアルトと同じく、いやそれ以上にショックを受けたオットーリエは、自分自身の中に引きこもってしまった。いままら何も言うことはなかった。もはや望みは断たれていたし、望みを抱くのは許されな  
いことだった。けれども、オットーリエの日記を見れば、その心の中をいくらかは覗くことができるので、いずれ部分的にご紹介するつもりである。(翻訳 215 頁)

後述するように、エドゥアルトは竣工式後自分の領地を出て自分の所有する分農場

へ向かうが、そこでも夢見るのはオッティエーリエとの「楽園」での生活である。しかし、シャルロットの妊娠 *Hoffnung* は、エドゥアルトのそうした希望 *Hoffnung* を打ち砕き、エドゥアルトは分農場からも出ていくこととなる。そして、シャルロットの妊娠 *Hoffnung* は、オッティエーリエからも希望 *Hoffnung* を奪うこととなり (*Hoffen konnte sie nicht.*)、こうして物語は第Ⅱ部に続いていくのである。第Ⅰ部での、特にシャルロットと大尉を中心とした「新しい庭園」の造営作業が *ins heitere Ferne* あるいは *ins Freie und Weite* に向けて開かれたものであったのに対し、第Ⅱ部は、語り手の言葉を拝借するならば、オッティエーリエから言葉を奪い (*Sie hatte nichts weiter zu sagen.*)、オッティエーリエの「内部 *Inneres*」へ、「自分自身の中へ *in sich*」へ向かう物語となるのである。

### 3. 「遠ざける」対「閉じ込める」

先ほど、シャルロットの「新しい庭園」造りには *ins heitere Ferne* あるいは *ins Freie und Weite* へ向かう運動が含まれていると指摘したが、それはシャルロット自身の特徴でもある。竣工式後、自分の領地を出ていくエドゥアルトの後姿をオッティエーリエは目撃するが、事情を知らされていないため不安に駆られ、様々な思いを巡らす。

*Ihre nächste Sorge, nachdem das Bewußtsein wiedergekehrt, war sogleich: sie möchte nun, nach Entfernung der Männer, gleichfalls entfernt werden. Sie ahndete nichts von Eduards Drohungen, wodurch ihr der Aufenthalt neben Charlotten gesichert war...* (I-17, S.379、下線は西川)

すなわち、ふたたび我に返ったオッティエーリエが次にさっそく心配したのは、二人の男が遠ざけられたいま、自分も同じくこの家から遠ざけられてしまうかも知れないということだった。エドアルトの脅迫のおかげで、シャルロットのそばで暮らしてつづけることは保証されていたが、そんなこととはつゆ知らなかったのである。(翻訳 202 頁)

事実、これより前の第13章で、オッティエーリエに夢中になるエドゥアルトの姿を見て、シャルロットは次のような決心をしている。

*Sie (Charlotte) sieht keine Rettung, als sie muß das Kind (Ottolie) entfernen.* (I-13, S.361、括弧内および下線は西川)

そして、〈この子はどうしても遠ざけねばならない。それ以外に救いはない〉と思うようになった。(翻訳 185 頁)

「新しい庭園」造りが外に向かう方向を孕んでいたのと呼応するように、シャルロツテはひたすら「遠ざけ *entfernen*」ようとするのである。そしてそのことは、実はすでに小説の冒頭で、シャルロツテ自らが断言しているのである。

第1章で、友人の大尉に自分のところへ来てもらうことを提案する際のエドゥアルトの「はくときみが、それぞれ庭と公園でやっていること—こいつは、二人っきりで隠者みたいな暮しをするためだけのものだろうか？ *Was ich im Garten leiste, du im Park, soll das nur für Einsiedler getan sein?*」(I-1, S.276, 翻訳 109 - 110 頁) という質問に対し、シャルロツテは次のように言うのである。

*Recht gut! versetzte Charlotte, recht wohl! Nur daß wir nichts hinderndes, fremdes herein bringen.* Bedenke, daß unsre Vorsätze, auch was die Unterhaltung betrifft, sich gewissermaßen nur auf unser beiderseitiges Zusammensein bezogen. (Ebd., 下線は西川)

「あなたのおっしゃるとおりよ」とシャルロツテは答えた。「そのとおりですわ。でもね、私の言いたいのは、異分子や邪魔になるようなものは絶対もち込んではいけないってこと。ねえ、そうでしょう、楽しみという点で私たちがいま計画していることにしても、いわば、私たちお互い二人っきりの生活の範囲内のことだけですもの…」(翻訳 110 頁)

「障害になるもの *hinderndes*」や「異質なもの *fremdes*」は何一つ持ち込まない、そのようなものを「遠ざける」というシャルロツテ<sup>11)</sup>と対照的なのが、エドゥアルトである。

第I部第13章を見てみよう。オットーリエが書いた分農場の売買契約書の写しの筆跡が、自分の筆跡と瓜二つであることに感激したエドゥアルトは、オットーリエの愛を確信し、二人は抱擁を交わす (I-12)。エドゥアルトは、その夜は興奮のあまり眠ることができず、庭や野原を歩き回った挙句、オットーリエの部屋の窓の下にたどり着く。

*Der abnehmende Mond steigt über den Wald hervor. Die warme Nacht lockt Eduarden ins Freie; er schweift umher, er ist der unruhigste und der glücklichste aller Sterblichen. Er wandelt durch die Gärten; sie sind ihm zu enge; er eilt auf das Feld, und es wird ihm zu weit. Nach dem Schlosse zieht es ihn zurück; er findet sich unter Ottiliens Fenstern. Dort setzt er sich auf eine Terrassentreppe. Mauern und Riegel, sagt er zu sich selbst, trennen uns jetzt, aber unsre Herzen sind nicht getrennt. (I-13, S.359, 下線は西川)<sup>12)</sup>*

森ごしに、欠けはじめた月が上ってきた。一般に暖かい夜は人を戸外へ誘うものであるが、あちこちぶらついたエドアルトは、世界中でいちばん心の落ちつかない、またいちばん仕合わせな人間だった。庭から庭へと歩いたが、狭苦しい気がして急いで野原へ出たものの、今度は広すぎるように感じられ、館へ戻りたくなかった。気がついてみると、オッティエの部屋の窓の下だった。テラスの階段に腰をおろしたエドアルトは、「鍵と錠前がいまほくたちを距てているけれども、ほくたちの心を距てるものは何もない。・・・」と、われとわが身に言いきかせた。(翻訳 184 頁)

マルテ王に追放されたトリスタンとイゾルデが、森や荒れ野を越えて愛の洞窟にたどり着いたように、エドゥアルトは月明かりの中、オッティエの部屋の窓にやってくる。『トリスタンとイゾルデ』の愛の洞窟と同じように、オッティエの部屋にはかんぬき Riegel が下されている。<sup>13)</sup> この場面では、オッティエの部屋にかんぬきをかけたのはエドゥアルトではないのだが、鍵をかけて「閉じ込める」というのは、シャルロットの「遠ざける」という行為と対をなす、エドゥアルトの特徴である。なぜこの場面でエドゥアルトは、言葉に出してまでオッティエが「壁と門 **Mauern und Riegel**」の中にいることを確認するのだろうか。「壁と門」が自分たちを距てている、「しかし aber」「自分たちの心は距てられてはいない」と、文章は「しかし aber」で接続されているが、むしろ、オッティエが「閉じ込められている」ことこそエドゥアルトの安心感の原因なのではないのか。オッティエが「閉じ込められている」からこそ、エドゥアルトはオッティエと心がひとつであると安心できるのではないのか。

エドゥアルトの「閉じ込める」という行為は、オッティエ自身に向けられるだけでなく、オッティエの記憶・思い出にも向けられる。新しい館の起工式の場面を見よう。起工式の際、礎石とともに記念として何か埋めたい人はいないかとの左官職人の呼び掛けに、人びとが応ずる場面である。

Die Frauenzimmer säumten nicht von ihren kleinen Haarkämmen hineinzulegen; Riechfläschchen und andre Zierden wurden nicht geschont; nur Ottilie zauderte, bis Eduard sie durch ein freundliches Wort aus der Betrachtung aller der beigesteuerten und eingelegten Dinge herausriß. Sie löste darauf die goldne Kette vom Halse, an der das Bild ihres Vaters gehangen hatte, und legte sie mit leiser Hand über die anderen Kleinode hin, worauf Eduard mit einiger Hast veranstaltete, daß der wohlgefugte Deckel sogleich aufgestürzt und eingekittet wurde. (I-9, S.333)

婦人連は先を争って自分たちの小さな櫛を入れ、香水瓶その他の装飾品も惜し気もなく提供された。オッティエただひとり躊躇して、次々と差しだされなかに入れら

れるこれらすべての品をじっと眺めていたが、エドアルトの優しい言葉に我に返り、父親の肖像を吊した例の金鎖を首から外し、ほかの装飾品の上へ置いて、手で軽く向うへ押した。すると、エドアルトのいささか慌てて気味の指図で、ぴったりした寸法の蓋は、重ね合せられ、密封された。(翻訳 161 頁)

「ちょっとあわてて *mit einiger Hast*」ふたを閉めさせるエドゥアルトの姿からは、オッティエリエの父親への嫉妬とともに、オッティエリエの思い出を「閉じ込める」というエドゥアルトの特徴が表れている。

竣工式でも、この「閉じ込める」というモチーフは繰り返される。ベンヤミンは、『親和力』に満ちている「死の象徴表現 *Todessymbolik*」に着目し、起工式のゴブレットや活人劇のマウソロスの墓標などと並んで、竣工式後エドゥアルトからオッティエリエに贈られるトランクもその象徴のひとつに挙げている。<sup>14)</sup> このトランクには「モスリンや薄手の綿布、絹やショール、レース」そして「装飾品も」入っているのだが、オッティエリエは「すべてが見たこともないようなあまりに高価なものだったので、自分のものにしようなどと考えもしなかった。」(I-16, S.372f.) フランクフルト版ゲート全集の『親和力』の解説では、このトランクをパンドラの匣と解釈しているが、<sup>15)</sup> オッティエリエがこのトランクを開けるのは、死の間際に服一着分の生地を裁断するときだけである。「彼女の死装束の布地が入っているこのオッティエリエへのプレゼントは、太古の墓からの発掘品を納めた建築家の容器に匹敵する」<sup>16)</sup> (Ebd. S.44) とベンヤミンが指摘するように、このトランクはそこから何かが出てくるというよりは、「仕舞う」ためのものである。後述するように、オッティエリエは、このトランクに思い出の品を詰めた後で死んでいく。

先ほど『トリスタンとイゾルデ』の愛の洞窟を引き合いに出したが、「閉じられた庭」あるいは「愛の庭」のイメージは、もっとはっきりとした形でこの物語に現れてくる。そして、これも「閉じ込める」という特徴の表れなのである。シャルロッテがオッティエリエを「遠ざけよう」とするごとに、エドゥアルトはそれを阻み、オッティエリエを自分の閉じられた世界に、「愛の庭」に囲い込もうとするのである。その例を見よう。

竣工式後大尉が去ると、シャルロッテはオッティエリエを「寄宿学校へ *in die Pension*」戻すか、「名家に *in ein angesehenes Haus*」預けようとするが (I-16, S.374)、エドゥアルトはそれに反対し、「オッティエリエをどこかよそへやってしまうこと、新しい環境へ追いやるようなことだけは絶対にしない」ようにと念を押し、家を出る (I-16, S.377、翻訳 200 頁)。シャルロッテとオッティエリエを領地に残し、エドゥアルトが向かったのは、谷あいにある分農場である。

水田恭平は、クルツィウスを引用しながら、この分農場が「『悦楽境』の条件を見事に備えて」おり、「ここは本来オッティーリエと共に住むべき愛の場所」であることを指摘している。<sup>17)</sup> それは、この分農場でエドゥアルトがふける次のような妄想からも明らかである。

Von diesem einsamen Freunde können wir soviel sagen, daß er sich im Stillen dem Gefühl seiner Leidenschaft ganz überließ und dabei mancherlei Plane sich ausdachte, mancherlei Hoffnungen nährte. Er konnte sich nicht leugnen, daß er Ottilien hier zu sehen wünsche, daß er wünsche sie hierher zu führen, zu locken, und was er sich sonst noch Erlaubtes und Unerlaubtes zu denken nicht verwehrte. Dann schwankte seine Einbildungskraft in allen Möglichkeiten herum. Sollte er sie hier nicht besitzen, nicht rechtmäßig besitzen können, so wollte er ihr den Besitz des Gutes zueignen. Hier sollte sie still für sich, unabhängig leben; sie sollte glücklich sein, und wenn ihn eine selbstquälerische Einbildungskraft noch weiter führte, vielleicht mit einem Andern glücklich sein. (I-18, S.385f.) (下線は西川)

このたった一人で暮しているわれわれの主人公についていま言いうるのは、この男が、心ひそかに自分の情熱の感情にすっかり身を委ねていたこと、そして、そうしながらさまざまの計画を考え出し、さまざまの期待を心に育んでいたということである。ここでオッティーリエに会いたいと思っていること、ここへ連れて来たい、誘いだしたい、その他、許されていること許されていないことを含め、何くれとなく、考えつくままにさまざまのことをしたいと望んでいることは、自分でも否定できなかった。すると、空想力が働いて、あらゆる可能性の領域をあちこちよろめき始めるのだった。ここでオッティーリエを所有する—合法的に所有する—ことが不可能だとすれば、せめてオッティーリエに領地の所有権を与え、ここでただ一人、静かに、誰の世話も受けずに生活できるようにしてやりたかった。オッティーリエを仕合わせにしてやりたかったし、自虐的な空想力によってさらに思いつめる折ふしには、ひょっとすると自分以外の男性といっしょにでもいいから、オッティーリエに仕合わせになってほしいとまで思った。(翻訳 208 頁)

「ここで彼女に一人静かに、誰の世話も受けずに暮らせよう」というエドゥアルトの願いは、一見オッティーリエの幸せを考えているようでいて、基本的にはオッティーリエの部屋の窓の下での場面の繰り返しにすぎない。エドゥアルトが望むのは、かんぬきの下ろされた部屋で一人静かに眠るオッティーリエ、つまり「一人静かに、誰の世話も受けずに」、閉ざされた空間に一人いるオッティーリエなのである。

ボートから落ちて子供が死んでしまい、オットーリエが寄宿学校へ戻る決心をした時も、エドゥアルトはそれを阻もうとする。途中の宿に先回りしたエドゥアルトは、オットーリエの決心を変えようとする。直接姿を見せて不意打ちにならないように、エドゥアルトは手紙を書き、それを彼女の泊まる部屋の机の上に置こうとして、結局はオットーリエと鉢合わせしてしまう。ドアの錠が下りてしまい、自分の部屋に入れなくなってしまったのである。しかし結果的には、錠が下りることでエドゥアルトが締め出されたのではなく、領地から出ていこうとするオットーリエの最後の試みが阻まれ、オットーリエは再び「閉じ込められる」ことになるのである。上述したように、このできごとは、同時にオットーリエが口を閉ざす（沈黙する）決定的なきっかけともなっている。

ここから出ていこうとするオットーリエは、その都度エドゥアルトに邪魔された。シャルロtteたちのところに戻り「沈黙を続けていた」(S.514) オットーリエは手紙を書く。

Ganz rein war mein Vorsatz, Eduarden zu entsagen, mich von ihm zu entfernen. Ihm hofft' ich nicht wieder zu begegnen. Es ist anders geworden; er stand selbst gegen seinen eigenen Willen vor mir. (II-17, S.514)

エドアルトを諦めよう、エドアルトから離れようという私の意図は、まったく本心からのもので、二度と会わないようにと望んでいました。ところが、事態は別の経過をたどり、エドアルトは、自分自身の意志に反してさえ私のまえに姿を現わすことになりました。(翻訳 321 頁)

エドゥアルトが「自分自身の意志に反して」オットーリエの前に姿を現すことになってしまったと言っているが、このすぐ前の部分では「私をがっしりと掴んで離そうとしない意地悪な悪霊が、外側から私に邪魔だてするようです Ein feindseliger Dämon, der Macht über mich gewonnen, scheint mich von außen zu hindern…」(Ebd., 翻訳 320 頁)とも書いている。この手紙からは、ここから出ていけないという自分の運命をはっきりと自覚していたことがわかる。

シャルロtteの「遠ざけよう」とする目論見を、エドゥアルトは阻止したわけだが、それでもエドゥアルトは満足できない。オットーリエが戻って来たにもかかわらず、「あの子は、僕から離れていったというだけではなく、ぼくの手の届かないほど高いところへ行ってしまったのだ」(S.515、翻訳 321 - 322 頁)と、エドゥアルトは嘆くのである。「閉じ込める」という行為を完結させるべく、『親和力』は最後の章に向かう。

最後の章は、エドゥアルトからオットーリエに贈られたトランクのことで話が始ま

る。オットーリエはエドゥアルトの誕生日が近付くと、トランクの生地を出して洋服一着分の生地を裁断するのである。その時私たちは、このトランクの中からは他には何も取り出されることがなく、逆にオットーリエがトランクの「秘密の仕切り」に「エドゥアルトの小さなメモや手紙、以前散歩した時のいろいろな思い出の押し花、エドゥアルトの巻き毛など」を隠していたことを知らされる。そしてオットーリエは、さらに「父親の肖像」をそれに付け加え、鍵をかけるのである。さてこれでオットーリエの思い出は閉じ込めることができた。あとはオットーリエ自身を閉じ込めなければならない。

オットーリエが亡くなるのは、エドゥアルトの誕生日の前夜である。彼女の棺は礼拝堂に安置されるが、その枕元には亡くなった子どもの棺が、そして足元にはあのトランクが置かれる。そしてオットーリエを追うようにして亡くなったエドゥアルトの棺は、オットーリエの横に並べられる。

So ruhen die Liebenden neben einander. Friede schwebt über ihrer Stätte, heitere verwandte Engelsbilder schauen vom Gewölbe auf sie herab, und welch ein freundlicher Augenblick wird es sein, wenn sie dereinst wieder zusammen erwachen. (II-18, S.529)<sup>18)</sup>

このようにして、愛する二人は並んで眠りに就いている。二人の墓所の上には平和が漂い、彼らに似た晴々とした顔つきの天使の顔が、丸天井から二人を見下ろしている。そして、二人がいつの日か再び一緒に眼を覚ますとしたら、何とそれは心温まる瞬間となることだろう。

現在形で綴られた文章は、物語と読者の距離を一気に縮め、読者は現在の物語として、生き生きとした光景を眼の前に描くこととなる。

しかし、本当に物語は完結したのか。オットーリエの思い出はトランクに仕舞われ、オットーリエ自身も棺に納められた。そして、エドゥアルトも今は、オットーリエの隣に横たわっている。だが、エドゥアルトは自分の思い出を仕舞うことはできたのか。エドゥアルトは、小箱や財布から出した「ひと房の巻き毛、楽しい散歩の際に摘んだ花、オットーリエからの手紙ぜんぶなど」を眺めている最中に亡くなってしまった。そしてこのことについて語り手は、次のようにコメントしている。

Und so lag denn auch dieses vor kurzem zu unendlicher Bewegung aufgeregte Herz in unstörbarer Ruhe; und wie er in Gedanken an die Heilige eingeschlafen war, so konnte man wohl ihn selig nennen. (Ebd.)

そういう次第で、計り知れぬほどの興奮をついこのあいだ経験したばかりのこの魂



も、いまは、誰も妨げることの出来ない平安を得て横たわっていた。そして、聖なる恋人に思いを馳せつつ永眠したのであれば、エドアルトも、この世のものならぬ仕合わせを掴んだと言ってよかったであろう。(翻訳 333 頁)

すでに引用したように、寄宿学校へ戻ろうとするオットーリエを連れ戻し、シャルロットを含め三人での暮らしが始まった時、エドゥアルトは「あの子は、ほくから離れていったというだけではなく、ほくの手の届かないほど高いところへ行ってしまったのだ」(II-17, S.515. 翻訳 321 - 322 頁) と、嘆きの声を挙げた。今回も同じなのでないのか。たとえオットーリエが自分の隣に埋葬されていようと、「オットーリエが自分から離れていってしまう、自分よりも高いところへ行ってしまう」と繰り返すのではないのか。小箱や財布に戻されることなく残されていった品々は、そうしたエドゥアルトの不安を代弁しているとも解釈できないだろうか。

## 注

- 1) 『親和力』の原文の引用は、フランクフルト版ゲーテ全集 (Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. I. Abteilung Bd. 8.* In Zusammenarbeit mit Christoph Brecht hrsg. von Waltraud Wiethölter. Deutscher Klassiker Verlag. Frankfurt a. M. 1994) に拠る。ギリシャ数字とアラビア数字は、『親和力』の第何部第何章かを表す。
- 2) 『親和力』出版前の1809年6月1日(『親和力』の出版は1809年10月)、カール・フリードリヒ・ツェルター宛てに、ゲーテは「私は多くのものを詰め込み、隠したものもかなりあります。こうした明らかな秘密を、あなたにも十分楽しんでいただけたらと思います。」と書き送っている(Ebd. S.979)。私たち読者は、出だしのこの文章からさっそく、その謎解きを迫られる。というのも、冒頭の場面の語り手による「命名」の行為は、実は登場人物自らが行ったものであることが、後に明らかにされるからである。エドゥアルトと大尉は、どちらもオットーという名前だったのだが、「いろいろ混乱が生じた」のでエドゥアルトという名前に変えたことを、読者は後に、登場人物たちの会話を通して知らされる (I-3, S.288)。この点については、Vgl. Ebd. S.1007、および水田恭平『タブローの解体—ゲーテ「親和力」を読む』(未来社 1991年)、7-9頁。
- 3) 邦訳は、潮出版版ゲーテ全集(『ゲーテ全集』第6巻、1979年)を使用した。引用する場合は、そのページ数のみを挙げた。なお、登場人物の名前がエドアルト、オットーリエとなっているが、本論では翻訳からの引用ではそのまま使用した。
- 4) 『親和力』が接ぎ木のシーンで始まるのも、いくつかの解釈ができるだろう。台木とそれに接がれる穂木の「親和性」と関連付けて考えるならば、この冒頭のシーンからは、執拗と言えるまでにオットーリエとの「親和性」を追い求めるエドゥアルトの性格が暗示されていると言えるかもしれない。

ハンス・ユルゲン・ゲールツは、エドゥアルトという登場人物の抱える矛盾を、封建的伝統の束縛と、市民階級の道徳的自由への誘惑の間で引き裂かれているためであるとしている

- が(Hans Jürgen Geerds: *Goethes Roman >Die Wahlverwandschaften<*. In: Ewald Rösch (Hrsg.): *Goethes Roman >Die Wahlverwandschaften<*, Darmstadt 1975, S.275f.)、この冒頭の「田園風景 Idylle」にも実は、種苗場で人工栽培したものをさらに「洗練し、醇化する zu kultivieren und zu veredeln」というエドゥアルトの性格が隠されていると指摘している (Ebd. S.274)。
- 5) 水田、前掲書 11 頁。
  - 6) „Ottillie war indessen schon völlig Herrin des Haushaltes… Auch war ihre ganze Sinnesweise dem Hause und dem Häuslichen mehr als der Welt, mehr als dem Leben im Freien zugewendet.“ (I-8, S.327)
  - 7) Vgl. II-5, S.423 und II-9, S.459ff.
  - 8) 第 I 部第 7 章にはすでに次のような文章がある。„Eben so wußte sie im Baum- und Blumen-garten Bescheid. Was er wünschte suchte sie zu befördern, was ihn ungeduldig machen konnte, zu verhüten...“ (I-7, S.320)
  - 9) 小説の冒頭シーンは最初に引用したとおりであるが、その続きの部分でも庭師が「右手には谷が開けており」、「広い樹海の先は明るい遠景になって eine heitere Ferne」(I-1, S.271、翻訳 105 頁) いると、苔小屋からの眺望を伝えてくれる。
  - 10) Vgl. S.454. „Glauben Sie mir: es ist möglich, daß Ihr Sohn die sämtlichen Parkanlagen vernachlässigt und sich wieder hinter die ernsten Mauern und die hohen Linden seines Großvaters zurückzieht.“
  - 11) 礼拝堂の壁や丸天井に絵が描かれ、修復作業が完成した時にも、シャルロッテは „Was er uns auch für eine Überraschung zgedacht haben mag, … ; so habe ich doch gegenwärtig keine Lust hinunter zu gehen. Du nimmst es wohl allein über dich und gibst mir Nachricht.“ (II-7, S.407) と言って、オットーリエー人を礼拝堂に入らせる。„fremdes“ に対するシャルロッテの恐怖が表れている。Vgl. 水田、前掲書 149 頁。
  - 12) 第 I 部第 12 章の後半、自分の部屋に戻ったシャルロッテは、湖での大尉との抱擁を回想する。この章は「まもなく彼女は甘い疲れに襲われ、穏やかに眠りにつく Bald ergreift sie eine süße Müdigkeit und ruhig schläft sie ein.」という現在形の文で締めくくられるが、引き続き第 13 章では、ここでの引用部分のように地の文も含め、現在形の文章が続いている。ここに引用したエドゥアルトの言葉の後で、文章は過去形に戻るが、第 13 章ではその後も何度か現在形の文章が顔を出している。後述するように、この小説の最後の段落も現在形の文章で締めくくられるが、そのことによって読者と物語の距離はなくなり、たとえばこの部分だと、現在形の文章により読者は物語世界の現在に引き込まれ、エドゥアルトの視点で物語を体験することになるのではないだろうか。
  - 13) ゲーテが『トリスタンとイゾルデ』のテーマやモチーフなどをどの程度意識していたのかは不明であるが、少なくとも『親和力』執筆中に、ゲーテは『トリスタンとイゾルデ』を入手し、読んだとのことである。Vgl. Rainer Wiertz: *Goethes >Wahlverwandschaften< und Wagners >Tristan und Isolde<*, Frankfurt a. M./ Bern/ New York 1984, S.16-24.
  - 14) Vgl. Walter Benjamin: *Goethes Wahlverwandschaften*. In: Ders. *Wahlverwandschaften. Aufsätze und Reflexionen über deutschsprachige Literatur*. Ausgewählt und mit einem Nachwort von Jan Philipp Reemtsma, Frankfurt a.M. 2007, S.42ff.
  - 15) Vgl. Goethe, a.a.O, S.997 und S.1035.

- 16) Benjamin, a.a.O., S.44.
- 17) 水田、前掲書 176 頁。
- 18) 『親和力』を、「生成と解体という二重性をめぐる物語」として解釈する永田は、『親和力』の最初の文章で登場する語り手の「私たち」が、この最後の文章で放棄（解体）されていると、つまり、「語り手についても、その設定と放棄の過程が忠実に辿られている」としているが（水田、前掲書 213 頁）、上述したように、『親和力』ではほかにも語り手が現在形になっている部分があり、小説最後のこの部分も語り手が解体されているというよりは、現在形により読者と物語世界との距離が縮まり、読者は物語世界をより直接的に体験することになるのではないだろうか。

